函葉集

六

元禄六年百冬

雪の散る竹うゑ終て手水をし　強通
られやをとをとん　梅は咲ぬ　宗波
ち流すが白ゝ海の波ぞ　て　友之
鶯の　あらし　流れたる　色紙
ちるひゝる　舟の　海にのる　月　紙水
大をたくゝをを　咲くゝ　寄良

てらくとぐらいはれもの等ぬぎて
旭こむらひきうつ除敷のを
なれをみふるくに人乃ゆくゆく
秋ふうゝ　れも有乃
世れ乃ゆき国もこさせぬ沙綱地
夢のあくをあくに望嵐
石之浦ねたくを芋枕
母のゆくをかりに新る
春掛白波の掬を居今之
湯を　ゆ　砂川の紅

夕葉　一
水
良
通
波
丑
差
水
丑
葉

よもひてゆかつ乃ゆかつ乃
やれあくされほをたかむ
くゆかくくかれくれ乃
松　ワくしてふくむくひもの
さんくの姫の気のくき
いやくよかつくつか
解くる塩れふ者る浦ゆく
くくくくくくに　わさむ
州はよいつの物　れ掬
わくに月を吐ちんく母

丑
丑
葉
差
水
通
丑
水
良
葉

秋山にある山伏の祈る夢　蕉
楚々人もなく寺の苔　五
うちすれ行をの蝉のうつゝ　通
うゝをたゝに入るかゝれ家　蕉
文字ひとつ捨てハ字の上　良
まれとうたひくあれいくさ　通
仲をうゝ世袋しゝうち　丈
る貴の〳〵酒ひゝく　水
花小舟比丘尼にたゞ乗もん　東
乗うほうの尾　蕉

元禄七年はゝ

梅うゝにのゝとねのめる山路哉　蕉
とゝろ〳〵て紙子の帽子　坐侍
象潟を雨の底にとり寄て　〃
上の　たよりにあるる米の香　菊
宵のうちゝ月の雲　〃
蒙うゝに　秋のさびしさ　坡

御頭へきくもらはるゝめいわくさ　野坡
むすめを堅う人にあはせぬ　翁
奈良かよひおなじつらなる細基手　坡
ことしは雨のふらぬ六月　翁
預けたるみそとりにやる向河岸　坡
ひたといひ出すおふくろの事　翁
終宵尼の持病をおさへける　坡
こんにやくばかりのこる名月　翁
はつ雁に乗懸下地敷て見る　坡
露を相手に居合ひとぬき　翁

町衆のつらりと酔て花の陰　坡
門で押るゝ壬生の念仏　翁
東風々に糞のいきれを吹まはし　・
たゞ居るよりは俵あむなり　坡
江戸の左右むかひの亭主登られて　翁
こちにもいれどから臼をかす　坡
方々に十夜の内のかねの音　翁
桐の木高く月さゆる也　坡
門しめてだまつて寝たる面白さ　翁
ひらふた金で表がへする　坡

そうかう女房の祝ふ振舞　茗荷
又ひとりもすまぬ　宰人　故
法印の物語をそうれさうら　茗荷
おいをとりうく青もきの山茶　故
とのおもてのまにまとあり　、
魚よくひあく　たまの数炊　茗荷
ちうちう一番おしよこうこう　故
赤をのうのくてゐ　茶角　茗荷
ちうちうもうこれ嫁をつれてきて　故
屏風のけうこうある墨　茗荷

小杉やの小鉢のいかむこ候漬　漬風
柳のひさかよし　北州　椶　茗荷
ひしうこうこ切草の茶もく　沾蓬
うこうこの柄ちうこうふ　椶くこ　利牛
食物のうこうこ紀の月　風
屋茶く椶ふ　茶の反逆　蕉
小猫ニ茶ハ本猫の紅面　椶蹴
沙一文ふ下紙をうこうち　牛

蕗蕷のいろはもとめつゝ　蓬
祭りすゝ傍ハ殿の　教経　菊良
ゆくたけものゝ神ふるゝ　疱瘡　蓋
ちよすすれかうろ鈴をつる　風
ちさてもゆゝ場をあり　庶のる　牛
釜をやよて　祝ゝ　ひうゝ　隣
月氣の紐もほゝけ　脊　蔥
登人ゝる　菊　朝　母　蓬
皆無の神ほのゝ　花の色　良
ゝゝ　あひゝ　蔥ゝ　細　風

菊ハ羽日　ちはゝ竹　園子　流化
孔　老ゝ　ゝく　色のゝ　ゝ　去来
翼入乃　ゝ　ゝ　ゝて　ゝ
又　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　化
大　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　来

旅人ふ渉をうつる四今尽
ひとのえたき　六月のすえ　化、
しつたる畑を一えんひらし
小屋しなしつる株のうら町　来、
渭ふのちよりしるる所をと
梅ちさうえんくさをやす　化、
手中を私の内よりて料理喰
作法の味ひ乃ひうきを　来、
上味乃本膳合羽ふ傘ふく
海や のを通は八つをなら　化、

名月のうやうたひ長ふ会　芭蕉、
一歩てもかよ　梨子の切均
むかうれ作法ふ的る　蕉の風　来、
ふをれ寺を無印よ　おしる
太のをれふ仏寺に沿うなる　来、
矣うけてやる　お役の文　化、
仏言をとめくる色の鉢
青四う孫をて　おちの風　蕉、
年月をる乃を　蕉乃所作乃頃
絵仕をたせく　る土の食喰　来、

月ゝ夜の浦物を見てゝ　来
雲と霊形をよりたてゝ　化
一のふるを踊ゝ　〃
ゝてゝゝゝゝ　来
糸言といへ浦もゆゝゝ　化
ふゝと数日ふむゝふゝ　蕉
蓑ゝゝる松よゝ花の咲ゝ　来
ゝゝ人ゝゝ　化
菊ゝ町ゝゝ供乃碧古紙　蕉
いつゝも　来

蓑笠俳ゝ糞　すゝ　極のゝ　芝世茂
日も笑ゝ　ふ　蓑乃あゝ　支考
蔦入ゝたゝゝふ入ゝゝ　〃
ゝたゝゝ第ゝゝ　蕉
ゝゝゝ月ゝ　〃
風も　ふゝ　考

歌の會すみかの河孔雀
毒ある花同じも居ぬ 侍
くるくるとおとなる物をやる
色ゝとれば 佑 孔雀 如 鈍
二こゝをたつのそ貴のをめく
鬱をそやして見るうは
中袋ふは以飛つけ蓋の月
横鐵おあそ角カれの常
伊はの乃田へ行やゝ原の明速て
松ゆのほゝ丸ゝ見ゝ

考
蓋
、
、
考
、
蓋
、
考
、

仏供して考僧ゝ命も宗ゝ
白いてしに 西の乱入
かけゝのの居千例ゝ之之蓋
手我をりつく人のをとふ
中張ゝ刈れいおのくこまり
重を嶽して鈴をつをく
雪風のすんくと歌 秋まる
拾ゝあゝと ゝ蓋
沼ハゝのやゝに水桶
ゝる 一を可ゝ

考
蓋
、
考
蓋
、
考
蓋
考
、

小洞市の町[illegible]る[illegible]人
[illegible]ハ　女房[illegible]
むと[illegible]月の入[illegible]

あの板木[illegible]
二の丸の[illegible]風
[illegible]の[illegible]
[illegible]の食[illegible]
[illegible]
氏神の[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]氏の[illegible]
[illegible]れく

[illegible]人の[illegible]作[illegible]
[illegible]を[illegible]込
[illegible]を吹たて
[illegible]る[illegible]の
[illegible]の秋
[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

屋敷の塀ちり芝を掃やすり
るのみるとをつけたる
牧場のもらに芝むぢの岩
蘭をうりあけく門をたる
切支てあらくをいかれ
お稲のあるのあたる月
うををを泊の行を塗を
油をうるれ おうをのつゆ
咲をれをを書をむをを人
折ひをいるきんを志田

流 前 川 流 前 川 流 前 川 流

皆拙を二文の去をををの書
蔭作ををを すをを紀のを世
鰯賣儀のふををををををく
むをの地をををを秋形
野雲海ををを知る 雲の月
美ををく松の 雲を橋を

をを流
貸水
前記
鳥井
蒼波
海面

高重ねたる雲の峯の巻ひて　友五
立ちそひしるる百相のるハ湖　作仲
云傳を嘆てハ方〳〵空　夕巻
まとりて降る揺の移むろ　芭
巻ひたる雲の峯と陽士の書　通
いかう巻に移ろ〳〵　言　良
相月の相月かつる作の面　水
たちそひ作のせうきよむ　波
作の月をうへよ　姫の縁　芭
ありひのうたゝ美ハうたう　通

華物のうちうむこれの飯　五
一うつりもあるの言　巻
姓なく言のあり舟高く　仲
硯をほとく良のうさう　芭
製表れハ玉うきはアのる　波
巻をうさりてうひちひさよ　巻
男ろ妹ゝすれをるうて　通
なうさ巻横てるうとて　芭
をれハ汁の年すの宵る　五
なうう作の和うきうや　水

秋の夜に美祝ふ人を愛

めでたしと　極さまざま　良

甲斐信濃月を海　波

隔てそなれる　の月　五

如何ぞ人を思ひ定

言の葉ゆゑに　知らく来且　強道

忘猶ふる猫ふみ使て　嘗者

子ゆすれるきちほりの月　さ宝

撫子いるあるかの人今　此筋

仁と心をれる白義　千川

独京

翁入ふ茶うりとこゝろを苦て
立て　古風のふる　奥　筋　蕉
ゆつしき　お書て　見やん　筋
形も　とうこそ　秋の　亀
世望ふ　おらるたる　布くゝ　蕉
解　を　彩く　おく　名月　の　香
ゝくと　京　廣　和の　家乃　言　川
一むれ　あるる　石の　秋　冬　筋
をゝくゝ　をしほや　とる　和りし　亀
礼より　乃ち　及し　ふ　ま　号　蕉

猿猿やむけに　ケ　秋に　死の　奥　川
言れ　ふる　を　ま　ゝ　ま　ゝ　風　亀
世ふの　ふ　を　浴　を　に　ゝ　ゝ　蕉
彼　家　ふ　ゝ　と　ゝ　ゝ　ゝ　筋
ゝ　ゝ　ふ　中　に　ふ　ゝ　ゝ　言
ふ　ゝ　ゆ　乃　ま　ゝ　ゝ　ゝ　川
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　亀
人乃　情　を　ま　ま　ゝ　ゝ　ゝ　蕉
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　筋
陀　袋　ゝ　ゝ　五　ゝ　ゝ　ゝ　亀

月乃高　雲を伝ふよおもむき　蕉
相ふる　ふる○のうこゝにたち　香
夜人の　化ぬ家にうゑてて　川
しづく　伝ふ井をうる　蕉
何たて　ものしたるなり　魚
塩れ　新をつむ雪　川
あけの民　我乃ふたゝく　筋
あつさ　しらをみる青柳　魚
それ　ちり新の義をうゝみて　蕉
うゝたすあるゝ　中立の夢　香

牛流民村乃ふるよやゝ月雨　汎竹
まゝ　ふゝ切　梅　擬　のゝれ　去来
一枝の　ふる　盃　康　押　合く　ゝ成
拂し　こ　ゝ　も　古　紙　ふ　惟然
月うけ　苞　の海　嵐　の　ふるなり　丈艸
挑　ゝて　八　四　の中　の　ゝ　支考

[illegible]　来
[illegible]十五夜あれ　竹
秋しやうとの[illegible]　然
[illegible]　野明
[illegible]　考
[illegible]　蕉
[illegible]　艸
[illegible]　然
[illegible]　竹
[illegible]　来

[illegible]の波乃ふ[illegible]　艸
[illegible]　考
[illegible]　明
[illegible]　然
[illegible]　考
[illegible]　竹
[illegible]　来
[illegible]　蕉
[illegible]　然
[illegible]　明

朝の月紀く烟ま　ゑ　竹
ゑ別なくに　ゑ　未
遠ゑにかりろけゑ御ゑ　蓋
かんをせるる渋漬の桶　然
出来てる青の夜音ゑ入く　明
なにをゑ笠みつ　竹
吸ゑて雪笑の　ゑ　未
紀後のお坊を又　ゑて　蓋
貴ゑちゑ忍の連ゑ　然
白　ゑ　ゑ　ゑ　明

ゑ　ゑの結お我ら屋ろ邪　ゑ　ゑ　ゑ
せ　ゑ　ゑ　ゑの青望　奇香
卯月乃ゑけ　ゑ　ゑ　尚白
石ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　自笑
松の木を杉風ふ　ゑ　ゑ　通言
おゑ　ゑ　ゑの　松岡

うつれる女子別るゝ日をつゝり　香
矣　数よ猶のよるに恋慕　慈
古塚よ　古びの文を拾ふ人も　癸
枯のとゝろ　うゝ　香
るゝ　れ　ぬ　と　た　く　芭　冥考
浮世の年の　つゝ　く　寺　白
あゝ　吹　ら　月　二　四
ほゝ　を　る　て　き　の　江山
拾ふに　江　を　向　く　慈
よゝ　る　れ　の　ち　親　法　癸

宗を入てくよう　地八分　ほ　ゆ　白
面り　紀　冬　の　さ　ゝ　い　香
き　仮　よ　ゝ　ひ　す　秋　く　反　ゝ　ん　雪
ひ　れ　る　ゝ　り　清　の　ゆ　と　よ　く　山
と　の　ち　ゝ　た　る　松　の　秋　考
ひ　と　ひ　ゝ　ま　毎　の　ゝ　雨　官江
ろ　ゝ　の　て　き　ゆ　の　墓　一竜
ま　り　れ　て　ま　を　拾　て　り　慈
仲　の　秋　源　を　弁　を　切　せ　り　香
之　法　ち　く　嶽　を　つ　ま　ま　り　香

うき人を尋てハ都の西の方
大原にあるたそれ安
一条や二条あるとれ小袖うち
ぬぎ　岩ゝに白の山風
ゝとうたれく鄙の
香を　ゆる　雪ゝち
破ゝ　伯父の新ゝ元ゝ
新の　味ゝ　竜
樹たゝむつゝ　ものゝと焚く
ゝゝ　ゆゝゝ　ゝの和ゝ

白
考
洞
白
江
雪
香
竜
嵐
白

ゝゝと扇や　ゝのゝ
ゝゝ　ゆゝゝの新
御　ゝ舟ゝ
ゝれて新ゝ
月のゝ行　の和ゝ
火ゝ　ゝの　ゝを

ゝ世
安世
支考
元茅
去来
丹垂

う時をすぎて庵の秋の花
芳
を見うしなふ　人のこと　作　菊
はつかうとおもふてうれしと思
世
和のはるかぜ　むかしの家
秀
いふるにんを　ふるうて
桂
去白の風　白を吹
芳
強犯るむすれば　結の
菊
そろく　江戸の学卦のこと
道
多ちうて　ひさ　ものの　ものを
ちつとのるに　枝節うつ

月をれを孔の家　ふよかこまり
あらう　音信や　猫さうり
石塔を　見ようて　ものを
常丈　仲さる　仲きつふ
小立　面白　仲ようて　面白
よあ　清ようて　ふ　賀茂
陽常に　行ようて　元ようく
別　波の　町のちうたきも
明月の　傍に　あて　実示
ふ　いう　海　ものを

蓋蓋ハ志門ほうと後妻のる
毎つくりてもなかハ上をうり
女房に出ハ筆ハれぬ見ぬして
庵をれ武士のこ妻をえと
ものの筆ハ杖ハ切をうり
田のこ所ハをやるふこ こと
牧の報をハるものてふ夜の月
酒しほと方と 外てのまれ
病めるく張るもるるふ所ふ
ちらくへるも不ハうんうり

夜の報や窓れて時ハ作為
家ハそもそもと蓋の極え
夢ハいつもの家に夢と入り
古きうハそれ反古ハ也
月うけの高もそる雲の多
志まりて形をとらるる者

不成
曲要
外言
恍然
支考
為

翠

雲

行を待命の卯へ迎ふ

山うつ石を負ひてもゆく

仮橋なる面橋小丸大井川

秀

書て 工夫 ゆ 然 準

おなじ年 ふ ふ よ ま ま 橋の姿

翠

おなじの 夕 ふ ふ 日 ま ま 世

雲

年 四 ま 年 を 為 ま ま た こ 紙

秀

枯 風 ま ま 門 の 屋 名

然

る 引 て 張 ひ 祈 る 自 の 新

言

屋 屋 年 ま ま え の 名 ま ま る

翠

雲

俳句のまゝの歌ふ形をれる

言

西 ま ま 俳 ま ま ま ま

然

ま 風 ま 書 信 の つ ま ま い ま ま 地

秀

歌 ま ま 村 く ぬ は け る ま ま ま

翠

雲 る ぬ 翁 も 四 ま い て

雲

行 う の 所 い 山 伏 て ま る

言

笠 苞 と 桜 ま 年 ま ま ま ま 紙

雲

ま ま ひ ま ま る 知 月 中 の 書

秀

お 家 と ま ま え ま 矣 ま の 所

然

像 の 夕 ま る 言 の 言 表

春こゝろをぬ源の引きの
長うへのをを毎へあつる
封ぜ文芸業る月の花
ゝ〳〵わ〳〵を上の上花
雪降つる旧事の角の河原町
ゝ嘶と 拾る 表 一図
その事に絶と足の長橋の上
大きれるめとんよ由る
鑒る 京る 歌 よく
絵うけつゝ 長柄の 下

絮 考 紙 考 言

茅ゝ花をとけ初て所の名表
世 拾ゝ世の ゝき 言る 考
歩 前 ゝ ゝの人と 叫 言
拾ゝと 古 代のあ 花 とゝゝ
世 叫 年と 和のゝ ゝ 花る月の入
ゝ の ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ

去来 派化 文成 之 丈学 支考

朝ぼらけ　遠のほるうむら　牧恋
見せもの　えをわかむる　堅壺
切立て　富士浅子　丹波山　野明
うゝ　ゝすの　みのうの　内
より合ひ　錦のゝ　ゝめさせ　冬
赤ら　すきゝ　りの　村の　芋
ちくゝ　さ風　合せて　戸を　考
こゝゝ　とゝ　よく　秦の　然
砂川の　流く　流ら　夕月　壺
雪ゝ　ゝる　地蔵の　ゝつく　明

石きふの　の　春やりの　乃
葉ゝ　ちゆ　て　面を　人時　東
けゝ　に　撰　歳ゝ　ゝの　芋
猿　切の　ゝの　ゝ　ゝる　考
鉢の　ちむ　すて　ゝを　ゝを　然
解　つき　あけく　汁　ゝり　壺
て　板の　雪て　一　ゝて　明
俗　上　ゝ　雪　た　ゝる　乃
菜　小　ゝん　ゝ　の十　種の　ゝと　東
ゝ　ゝ　さと　秋　八　ゝ　芋

此夕　月を見ていとゝ心ゝ
しゝの笛の吹るゝ　うゝつく
百音つゝく　鉦の声のたゝゝと
まゝ　ゝ　市の小あ魚
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
むこと　舅の　あ　ゝ　接拔
此庵の　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
茶の　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
日　ゝ　一日　ゝ　ゝ　ゝ

考
然
壺
明
ゝ
考
字
義
然
明

柳小折ゝ荷ゝ　初ゝ楽　芭蕉
百引　折ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　洒堂
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　去来
塀ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　支考
月ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　丈艸
小鍋　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　素牛

上をとりてくるとて海の藻を刈
る橋を入るゝ所の通りに沿
ひたるにも命をいつもの乃とくまて
大工乃新宅を祝をする
竹植に成るこうる庵裏のそ
たくるを結くる弟徒利をきる
降出しもとゝ雨のそゝと
恐くやうにしるる波之
折鏡を焼と如かり
過てこうゝ　明の本に表

蕉堂
蕉
来
考
牛
蕉堂
卅
来
堂
牛

月花ゝ小さ門を出川入り
宗　たゝ人見乃見る猪板
所をゝ新しきる醫者の
新宅に成ほつてくる
こゝろ乃淋しをとゝ
迎をたのむ川猪
庵寄に一遍夜ゝ津源り
御前ゝ人と次の田樂
迎込乃猪を嵐にこゝと音
ゝ新に明屋あゝ次也

蕉
堂
卅
蕉
堂
来
考
蕉
堂
牛

夢孔乃紅く紅を心坊　来
白拭　紅葉　ある人牛代の　秀
川辺に流て宝きを見て　蕉
岩ものせる
正月　いかやれハ海　芋也　州
梅　清ふ　ものれと　壹
咲ものの　ものの　弱れ　清鶯　来
彼岸を　なけて　お　除　行く　牛
行ものを　ものも　花　思い　新　州
役者　もやれ　衣乃　蕉　秀
来

秋ものの　ものの　弱れ　清鶯　蕉
ものの　ものの　弱れ　清鶯　蕉
月　ものの　ものの　大　新　行く　本節
ものの　ものの　清　清　清　清　蕉
清　清　清　清　清　清　清　支考
清　清　清　清　清　清　清　節
ものの　ものの　弱　細　立　蕉

夕食をとりて寝まれば猫の
行方分らず
高くなれば必ずうるさく鳴
くれば登れども
佛壇の傍に月の
樫の木に鳴く風
八郎の孔雀
舟前に錆刀
和尚法名地獄に
おちる

考
然
蓋
節
考
然
蓋
節
考
然
蓋
節
考
然

強くして細縄たるれば垣
たれば強くほどく屋の角も
来訪ちひさくやうに供をせく
蓋
見たるを
行燈のうしろ少
節
ふ長竜を
然
半鼓八方に雨をやうに
蓋
行方を
考
ちくと京の
然
嫁とむこ先
節
考

宮ハ夕ぐれ　遠くてまさる大鐘の音　蕉
垂りたれたるりのさかしや　節
髪結くる　膏まで日比舩月頃　然
木に十まくり柿を停る　蕉
満作に中摘仕あけく喰余る　考
をしけも　盥しあてし土繪　然
拔うちをわすれて猫の逃あるき　節
肩ゆりのよろける　掃除日　考
花さけハ茶を摘納むしの山　蕉
古庵の　秋れ　春つちけ宮　然

蝿すらふなや　秋の身日ぐれ　野童
菊のさく　咲さらしの　皺　丈哉
小竹をさりぬ萩に鳥拵く　路通
狗して來る奥のそしり　史邦
引と延りみされよ覺る舩床に　丈草
たくさんしとせなりしまする　去

うちあげていたる人を見ひる
ものつくひまもなくはらひけ
地下のたちかたてをたてたる
ちちをくくるをみ小ちかく
ちまちたるをかしてをかり
ぬちちかつたあもめのたち
石ばいつたをかめてるうち
半のをもみて半ばかりを
酒の徒をくあるたてハ盛ものを
意のハ珍にあるひたく

苑
壺
邦
芋
逸
苑
壺

今ちのくハ郎ちう月のかるは
西の方仏まるこちのくムひす
隣好の愛をけるをちのまる
家ふちうにもむる者ヲ
地下ハ張うと意ようをかて
珍しを元張の　下ちを
行を て接ひ次年の古家屋
鳴るつくらちと意ちかる
供をくてたるもかるの敷地
屋の中にうるいるつる

[illegible]年に熊迷義氏名月和
歌可聲の又[illegible]義 [illegible]さ
やたしたる[illegible]手[illegible]うつと教へ[illegible]
みまの和面[illegible]義[illegible]さ[illegible]
郭[illegible]て[illegible]呼て[illegible]
[illegible]の年に おろ[illegible]
[illegible]作例さう 迷[illegible]
食苞[illegible]く 義[illegible]の上
[illegible]自 [illegible]を [illegible]
義[illegible]つむ 發の[illegible]

[illegible]ハ[illegible]とすめぬそ遅れ 山居
まさおうやれ[illegible]るうち 義成
る何の[illegible]き牧の地に 〃
に[illegible]千石のまの[illegible]山 居
[illegible]義[illegible]を引する義の月 〃
[illegible]の[illegible]れる義を 前

ゑもの比つゝるの茶筅しらく　翁
かゝる吉にきくをやし海　店
蓮生に座をとやあるとよふ　翁
酒のみさかの御きさ革ぶ　店
丹波かゝ役もなくて明らね　翁
花季りこれと利をよえ雲　店
富士みとくも茶くりと遅ちし　翁
たゝ原中は月八さんまゝる　店
神明の記つゝとしく　きさらぎ菜　翁
花ゝうり山く京も坊ましまる　店

寒の後おつゝ茶を作し蝶　翁
ゐ野りつ見とて鶯のなく　店
春のりに春風の仏の作ゝらと　、
うりしや御様くみしむ　翁
いろうし皆役座をとらすひ　店
同つしもわりは霰ふるなり　翁
つひさる欅舟り白ゝくれく　店
かけの木地を色む魚たく　翁
ころしと幻揆むとはほよおは　店
そろの芋の花市る外　楳　翁

雁

雁

雁

雁

雁

雁

猪鹿

鹿

配刀

更衣

七芳

年袋

紅葉のふかきなかるやなて　弱
名ぬしと地下と立ならぶ　部
やき飯をうりてもみのつきさ　翠
おのひとつさしぬくうり　芳
けるハ扇のるゐ仕事　袋
明ハのぶりて月をえらひ　若種
紙さしの小屋のあをぬるや　力
角力をまけてをるゐ　部
山ゐハ　山伏むしの一うま　弱
家ゐるゐ　彩　のちちの菜　袋

梦ちて家ゐ扇の小　芳
ち　ちさうしたちの根　弱
坪ちの川深の石積上ち　翠
口ちゐ　風とう　合　種
大名の供のちさの果もち　力
白のかの　の起る　血の石　部
一年ハ代をおて来た深の新　弱
たゐの定ふ　寒ちまる　翠
炒天ち革百　細工の和尚て　芳
いちの家の　柳ちの天　力

第六はまうねふたえて成る也
千ゝるゝ〳〵の生ある三ヶ月
神を八百供とおてある所
〳〵〳〵者よ　体む　武士　弱
永ちて筋するんゝつえ　鉄　弱
加たゝ〳〵る　関　のふれと　芳
耳髓とそゝゝやに横之来　鉄
砂金のまるき　成　翠
大ふるふ八ゆ引ある法の籠　刀
采　のゝ物の　たゝむ之月　薙

真享四年卯月廿五

ゝゝまれ家を西ゝひゝゝゝ　如行
ゝゝ〳〵ゝる　ちゝれの書　卯増
草ふきのゝゝれ書を掃き立て　関水
人のたゝゝハゝゝの枝ゝゝ　玄成
有ゝよ　ち重のかゝん　ゝ　桐葉
梯子のゝけ　とよのゝる牧　東成

拾遺集ハ 律師よりあつめられる　工山
歌の ぶんれい　いつも 歌風　桂揖
藤井の歌も 所さ 紀貫之 よ　筑前
ちらしてやうちおハる の 歌　行
弱 四 今 とされハ 西 ゆ　増
物 てのはの のうけつをつ　水
高 歌 を 中 ゆ とおりひも　翁
かくをは 文 の 袖 ゆ ゆ　重
俗 の 東 ハ 序 に なりも 歌　芳
一 ゆ ゆ なる 歌 の 表　山

数 れ を 行 ゆ て 身 も 山 き は か　揖
高 う ゆ 風 の　ゆ ゆ も き の 音　増
あ ゆ の 音 ハ ま く も つ れ 西　行
後 義 原 る　物 の ゆ く　芳
捷 ゆ ハ ゆ と 海 の 行 ぬ 人　重
水 人 も ゆ ゆ ゆ ゆ ゆ ゆ　翁
紙 ゆ る ゆ ゆ ゆ の 引 ゆ 数　水
正 す ゆ　ゆ く　音 の 音　行
ゆ 稲 の 序 ゆ 後 る 序 の 白 ひ　山
や ゆ る ゆ ハ 月 は ゆ も 音 ゆ 音　重

みしてもうれさ迄を月わり　翁
ちこゝ　すこゝ　秋の水　梅
きそうるうのうつ雪の中　碧
身おの枝をいこいておく　水
おナこうにうさ行のはきたる　蓼
うゆをよまする　重深の徒　翁
秋表も来うすを紅　ようる　巌
沈ちうする　俳寺の小屋　山
ふ沈のうれを古郷戸ま松蕊を　行
郭なうと　白なうく　梅

秋の部

色〳〵のうつもうつの白菊　叩端
松のゆうきを　芋屋の秋　桐葉
まんるうたの月のうつうつ　安成
ゆうの　ようは人のうつ〳〵を　乗房
ゝうる　ゆひも後を立うハ　工山
あけ坊一うの行うるの雲　閑水

けわしう何をたづねよと行義せん　牧童
きしうとわたる行舟村　端
うつる江色よりそうつむう　蓋
古の聲おもしんとの安ら　菊
梢ゆるぶ　ぶんぶうう　香
りしたちをのぶる義伐　山
白ふりの　烟　ふのあるれや　水
硯をたる　月　のをとよ　蓋
音をしハ行をわりひのをのな　菊
きさ月のさめぬ　眉　のらうき　香

数も寺院籠堂にちるぶ広う　端
花月てふの　音ぶくなる音　水
きくと鄙ぬ石の古宗ふて　山
破て又移る　けさしの上　菊
夕花ハ宿もきうあ蓮池う　蓋
月水しるまのちとる　端
迫うる　本堂のるをうた花　菊
ぶようれ　義おうり　山
急うあと鐘ぶうくようたう　香
女しうたのりとちるる色　蓋

雪の日は硯にかゝるかしこさ　水

蝶よく聲の忽ちておろく　蒼

砂川を突よこちらも遠わりさ　鵠

見る牛を牽きつれけり　山

奥ふかきやうも捨れハちらい絵　萬

川灯の塔の細き明る　諸

なまると見へハ果は風になり　蒼

笠一ぱいなれの一時　扇

住かしる枕海洞のかくれまし　山

菜に酒小先衣のあくら　菓

済みくとさくきりて　梅宴　甲要

竹乃あられを御わたしや　非然

短月小鶴市々尾をかりく　古芳

すれてすゝ母と豆腐黄れ切　雪芝

大八乃と住ひより下　椀小路　猿雖

師走乃身をあるか虎之恵を　芒紙

卓袋
九節
芝
翠
然
鉢
袋
芝
鉢
袋

芳
節
然

百のあれはえてくるる張の梅花　銀
ちふとしく雪　あ遊坂の杉　意
百明るこれ百ゆてくるる春　寂
雪しくれくる頭痛やこころ　弟
引きてくる百てくる意の門　芳
ちるを花ちるてをこゝろ水仙　芝
ゆくとき世てに年る貝の売　銀
いろいろあれ花　行くく新風　愁
ほいくと花の咲ける大自然　蓼
柳にまくるたるのゝ高月　寂